

年度	2026年度
試験日	2026年2月19日(木)
学部	教育学部
入試制度	一般選抜(C方式)
試験科目	総合問題(教育学科)

出題意図及び解答例(解答のポイント)

【注意事項】

※公開する解答例には、別解がある場合があります。

※お問い合わせいただいた内容は本学で確認し、必要がある場合には、入学センターWebサイトに掲載いたします。個別に回答することはいたしません。

※お問い合わせ先：早稲田大学入学センター nyusi@list.waseda.jp

■出題意図

教育学部では、教育者(教員に限らず)としての資質を有し、学問的に裏打ちされた知識を基盤に物事を判断する力、新たな問題を言語化またはモデル化し、解を提案したり論理的に説明したりする力、社会および自然界の事象を多面的に捉え、既存の問題設定や解を適切に批判し、建設的な提案を行う姿勢の育成を目指している。なかでも教育学科は、「教育に関する事象を論理的に理解する考察力」の育成を目的とするところに特徴を有している。

C方式では、大学入学共通テストで大学における学修に必要な基礎力を評価するとともに、教育学科の個別試験で「資料を読み解いたうえで、読解力・思考力・文章力並びに教育への関心を問う問題」を出題することとしている。

今年度の出題の特色は、①現在の学校教育で行われていることや、それについて言われていることなどを自明視せず、批判的に検討し、求められるべき教育のあり方を自ら考え出すことができること、②ある社会現象を、どのように切り取り、それをどのように解釈するかによって議論が異なってくることを理解し、考察の幅を上げられることを考慮する点にある。

本問題¹では、学校教育をめぐる通説や常識を鵜呑みにせず問い直し、めざすべき教育観を提起する思考力や構想力(想像力)を問う。教育に関して、資料①では「逆説」、資料②では「神話」に言及している。テストでよい点をとることと、よい教育は必ずしも合致しないということはよく言われることであろう。また、批判的思考力と基礎的な知識や技能は対置されたり、どちらか一方が重視されたりすることがある。回答者は、学校の授業や生活を通して、そのような教育をめぐる矛盾や対立を体験しているかもしれない。問題¹は、そのような体験に基づく漠然とした疑問や違和感を言語化して客観的にとらえ、矛盾や対立を打開する教育について、教育学科が目標とする「教育に関する事象を論理的に理解する考察力」を発揮して構想することを求める。

本問題²では、誰もが眼前に見えている社会現象(ここでは若者の幸福感)を、アンケート調査という方法によりデータとして切り取った時、同じ社会現象を対象にしても、方法によって異なるデータとなること、そのため、データにもとづく解釈や議論に違いが出てくることを認識すること、そのうえで、なぜ、そのような差異が生じるのかを、データの作り方や論者のデータの読み方などに着目して、多面的に推測することを目的とする。同様の対象を社会科学的に分析しても、分析方法によって異なるデータが得られること、そして同一のデータに対しても、その解釈が一義的には決まらないことを考察することを求める。

2. 1 の出題内容と各設問の出題のねらい

問一 資料①は、これまでの教育改革の失敗を振り返りながら、今後どうすべきかを提案している。その失敗のひとつにあげられているのがテスト政策であり、「テストの点数が上がるほど、教育は悪くなる」という「逆説」が指摘されている。テストで高得点をとることを否定はしないものの、それだけでは、学ぶ喜び、自己・他者理解の深化、民主的市民性、理性的な意思決定などを養うことは難しい。そればかりか、それらの達成が阻害されるおそれがある。解答者も、学校教育などを通して気づいているかもしれないこの「逆説」の理由を、資料全体を通読して見出すことができるかを、この設問では出題のねらいとしている。

問二 (ア) 資料②は、思考力や判断力を重視する教師は、読み書き算のような基本的な知識(事実)を軽視しているという誤解があることを指摘している。そのようなまことしやかな通念を、現在の日本の学校教育に関する知見を基に、自らの学校での体験もふまえて、端的に言語化することをねらいとしている。

問二 (イ) 読み書き算を重視しない教師や校長にはお目にかかったことがないという、資料②の筆者の経験談に基づく英文の和訳を求めている。資料②の全体を読解して、思考力や判断力と基本的な知識(事実)の習得は相反するものではないという教育観をとらえることをねらいとしている。翻訳を求めている文中に含まれている聞き慣れない団体の名称も、その教育観から推測して訳すことが求められる。

問三 1 の二つの資料は、理論的立場は異なるものの、基本的な知識や技能を教育するだけでは不十分で、それ以上のことを教育する必要があることを説く点において一致している。資料①は教養主義の立場から、読み書き算や、各教科の幅広い知識を身につけ、協力して考え、生きる喜びを感じながら、行動できるようにする教育を説いている。資料②は社会民主主義の立場から、自分たちが直面する問題を解決する過程を通して、読み書き算を含めた基礎的な知識と、社会に関与できる態度、性格、技能を共に身につけ、民主的な市民を育てる教育が主張されている。理念は違えども、テストの点数や、(テストで測定される)基本的な知識以上の教育を求める点で共通していることを理解することを出題のねらいとしている。

3. 2 の出題内容と各設問のねらい

問四 資料③-2 は青年の幸福感を5つの選択肢から1つを選択させる方法をとっている。こうして作られたデータのどの部分に着目するかによって、社会現象の解釈や、それにもとづく議論が異なるという理解できているかの確認を、この設問の出題のねらいとする。

問五 同様の質問に対しても、資料③-2の5カ国を対象とした場合と、資料④-2のように33ヶ国に拡大した場合では、国ごとの差異の見え方が異なることを理解できているか、また、厳密には質問で用いている言葉にずれがあることに気づくかの確認を、この設問の出題のねらいとする。

問六 若者という対象に対して類似の質問をした場合、異なる傾向を示すデータとなるのはなぜかを、多面的に推測できるかがポイントである。これは同様の現実の社会現象を切り取るとしても、調査対象、その範囲、調査時期、質問で用いている言葉、質問の選択肢などアンケートの作成方法によって回答結果が異なること、また、作られたデータのどの部分に着目するかによって解釈や議論が異なってくることを推測できるかの確認を、この設問の出題のねらいとする。

■解答例（解答のポイント）

1

問一

テストや点数だけで学校教育を改革しようとしても教育は逆に悪くなる、という「逆説」が生じる理由（たとえば、教育哲学を欠いている）を理解していること。

問二

- (ア) ここでいう「教育に関する神話」とは、考える力を養うためには、基礎的な知識や事実は重要ではないということを意味することが理解していること。
- (イ) ここでいう「教育に関する神話」が誤っていることは、足し算を教えることに反対したり、読み書きができないことに賛成したりする団体や組織は存在しないという事実によって示されるという主旨の英文であることを理解して訳していること。

問三

どちらの資料も共通して、基本的な知識や技能以上のことを重視していることを理解していること。

2

問四

「幸せだ」と「どちらかといえば幸せだ」の合計に各国の差異はないが、「幸せだ」に着目すると、各国の差異が明瞭になることを理解していること。

問五

資料③-2の5か国を資料④-2に位置付けると相対的に順位が低いこと、また、資料③-2での5か国の順位と資料④-2における順位とは違いがあることを理解していること。

問六

1.調査対象者の年齢の違い、2.調査時期の違い、3.回答の選択肢の作成方法の違い、4.2つの資料の質問の言葉の違い、5.対象者のサンプルの取り方の違い、6.作成されたデータの利用部分の違いなどにより、異なるデータとなり、また、解釈が異なってくることを多面的に推測できていること。